

曾野綾子

贈られた
眼の記録





贈られた眼の記録

曾野綾子

贈られた眼の記録

一九八二年三月二十日 第一刷発行
一九八二年十二月十五日 第十刷発行

著 者 曾野綾子

発行者 初山有恒

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五ノ三ノ二
電話 〇三―五四五―〇一三二(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

定 価 九八〇円

まえがき

この本のもとには、レポート用紙に大きな字でほんの数行ずつ書いて行ったメモである。なぜ、レポート用紙を使ったかという点、私は、「見えなくなる」ということはどういう心理の状況を伴うかということをも、もし主治医が望みなら、お世話になったお礼に退院の時に提出して行こうと思っていたからである。

私の場合、それは、「見えるようになる」ということはどういうことだったか、という点にまで発展した。先天性の強度近視だった眼が、白内障の手術の結果、裸眼で健康な人並みの視力を出すようになった。もちろんこれは「稀有」の例なのであろう。

医学の技術革新と、ドクターの神技によって、私は肉体的には、ほとんど「病後」の意識を持たなかった。同じ白内障でも、強度近視を伴うものは危険率が普通の手術の場合とは違って非常に高いとはいっても、成功してみれば、患者の私はかなり高齢の患者さんたちが気楽に手術を受

けて、見えるようになって帰って来るのと同じ感覚であった。

しかし、精神的には、数カ月の間、私はどことなく病後であった。私はその感覚を甘やかしもしたが、同時にこんなところにくずくずしていないで早く脱出しなければ、という気持も働いていた。

その意味では、この記録は、私の卒業の書である。

小説書きは、競馬馬に似ている。どんな草競馬の駄馬でも馬場の中に入ると、血が騒いで走り出す。私は視力がもう書くことには耐えられなくなり、まともな原稿は一行書いても苦痛を覚えるようになって、記録だけは自分の心の救いのために、何とかして、十字でも二十字でもいいから、とり続けようとしていた。

現実の病気がどうであろうと、人間の心を救う最大の要素は、「日常性の中にいられる」ということである。白内障はその第一の点からまず犯されるという点では、不幸な病気である。死なないから、と周囲も当人も知っているから、騒ぐことはない、騒いだら悪い、と思うが、長い人生で、数年間、その人は仮死の人生を味わわれる。神経痛、喘息、リュウマチ、などとともに、人生を部分的に喪失する、という感じのある病気である。

レポート用紙の報告書以上のものが生まれたのは、お二人と一人のおかげである。

第一は、私の眼を手術して下さった馬嶋慶直先生が、単に肉体的な眼疾の推移だけでなく、患者の心を重く見られる方で、私の記録はぜひ読みたい、と言って下さったからである。

もうお一人は、名古屋保健衛生大学学長の藤田啓介先生で、先生は早くから、患者に読ませられるように体験をまとめてほしい、とおっしゃって下さった。

それは根本のところでは、願わしくないものであった私の病気を、今となつては少しでも有意義なものにしてやろう、という親心であつたと思われるのだが、私は初めは、このレポートを提出すれば、それがタイプ印刷か何かになつて、大学病院の患者さんに配られるのかなあ、と思つていたのである。

第三の人物は夫の三浦朱門である。彼は同業として、私たちの仕事の陥る危険性も苛酷さもよく承知していたと思うが、私が「半盲人」から卒業して、目あきの生活に生涯で初めて踏み入るには、どうしてもこれを書かねばならないことを一番よく知っていたのではないかと思う。手術後三日目に、彼は、私が一カ月でこれくらいの本は書き上げるべきだ、という命令を下したのである。

私はこの本の中で、白内障という肉体的な病気との闘いだけを書こうとしたのではないことを、最初にお許し頂いておきたいと思う。

私が書こうとしたのは、眼を失いかけながら、再び視力を与えられて、私が生きなおす前後の、私の周囲の状況全般であつた。なぜなら、人間の体の部分は何れも大切だが、ことに眼の場合は単なる感覚の器官であるということを超えて、それはその人の精神と魂とに、むしろ深く結びつくからである。

つまり眼について書くことは、私の生き方、魂の感じる諸問題、友人への思いなどと不可分だったのである。

一九八一年十二月

曾野 綾子

付 記

一つだけ最後まで私の心から離れないものがある。それはこの本の内容の性質上、これは盲人の方たち用のテープに吹きこまれるであろうということである。しかし、私は「見えた」という話を実はどうしてもしたくないような気がしている。私が努力して得たのでもない、いわば純粹に贈られたものを、見せびらかすことは心ないと思うのである。

これが一面で「記録すべきものを記録すること」を目的に書かれた以上、私が生まれて初めての世界を見た、その時の思いを記さないわけには行かない。しかし、そのことに私は深くためらっている。

盲人の方たちは、私が逃げ出して、超えられなかった苦しみをくぐり抜けた方たちである。いたわる必要はないのかも知れない。むしろ祝福を送って下さるのかも知れない、と思いつつ、私の心にはやはりひるむものが残るのである。

贈られた眼の記録 目次

まえがき

第一章 三重視の世界

11

第二章 滝の向う側

26

第三章 果樹園の中で

38

第四章 この世に恋して

62

第五章 大通りの眺め

80

第六章 夕映えのラフマニノフ

97

第七章 奔流の天の川

118

第八章 朝のセロリー畑 135

第九章 「夕 明」 156

第十章 ある原罪 170

第十一章 最も小さい者のために 188

第十二章 パパの贈りもの 205

*

〈巻 末〉

曾野綾子さんの眼症状／曲谷久雄 I

曾野綾子さんの白内障手術記録／馬嶋慶直 IV

*

図版／吉沢家久

装 幀 司 修
ハフラ・フンジエリコによるV

贈られた眼の記録

第一章 三重視の世界

なぜ小説家になったのですか、という質問は、作家と呼ばれる人たちが、必らず何度か受けるものであらうと思われるが、それに簡単に答えられる人はまた、ほとんどいない筈である。そのような問いに対して、総ての理由をあげるとなると、大長篇数冊分になるだらうし、かりにそういう誠実を見せる人がいるとしたら、それもまた野暮で傍迷惑なものだと思ふ。それでたいいの人は、はぐらかすということではなく、ほんの一部を答えることになる。

「金がなくて困ってましたから、懸賞金目あてでしてね」

「継母にひどく虐められましたのね。あの女のことを書いてやろうと思ったんですが、考えてみると困らされたのは、本当は向うの方だったでしょうね」

といった具合である。

私の場合はこれが次のようになる。

「生まれつきのひどい近視だったんです。昔から人の顔が覚えられないから、人に会わずに、一部屋に閉じこもって、蒲団かぶって寝ていてもできる仕事を選びたいと思ったんです」

これは一面の真実であって、小説家になりたいと思った理由の総てではないが、けっして思いつきの言いわけでもない。父母が仲の悪い夫婦であって、子供の時から家は休まるどころではなく火宅だと感じていたから、現実を逃避できるものなら何でも利用した。小説もその一つの手段であつた。

近眼がどういふ心理状態になるかということは後で述べるとして、私はとにかく成長してからあとは両眼とも、マイナス十一〜十三ディオプトリー、つまり〇・〇二以下という強度近視の眼で生きて来たことになる。コンタクト・レンズを入れたのは一九六五年からであつた。本当は私は偽物が嫌いで堂々と眼鏡をかけていたかつたのだが、これくらいひどい近視になると眼鏡は分厚く重くなり、日本人の鼻梁は隆起が控え目だから、ずしんと重い近眼鏡はすぐにずり下つて、せつかくの眼鏡も度の合わない部分で見ているようになる。

私のコンタクト・レンズの面倒を見て下さつた曲谷久雄先生に、

「あなたのような眼のためにコンタクト・レンズはあるようなものですから」

と言われて、私は渋谷この「偽眼」を心理的に受け入れることにした。

それでも私はまだ若かつたから、行動にはとくに不自由を感じていなかった。昔から、人の顔を覚えられない、とか、黒板の字が読めないとかいうことはあつたが、それは私にとって記憶に

ある限りずっと続いている「常態」である。二十三歳で自動車の運転免許証もとったし、レンズさえ調節していれば一・二の視力も得られた。つまり朝起きて次の瞬間に眼鏡をかけて動き出せば、別に何ということはない。

他の点に関しては、私は比類なく健康であった。百六十四センチ、五十五キロの体重もほとんど変らない。寒さは多少気にするが、暑さには強く、羊ばかり二カ月間食べろといわれても平気。小さい時、あまり神経質に母に育てられたので（私は母が高年に生んだたった一人の娘だった）、そういう過去へのレジスタンスもあって、不衛生、危険、といったものにもかなり耐久力をつけてあった。

問題は総て首から上にあり、歯も耳も大変よかったが、眼の問題の他にも不眠症があり、根性と知能もちょっとずつよろしくない。そのあたりが、とくに卑下もせず誇張もしない私の実像であらうと思う。

一九七三年の秋（当時、四十二歳）、私は何度目かの運転免許の切り換えの年に当たっていた。警視庁の鯨洲（きんしゅう）の試験場で文句を言われるのがいやだったので（私はその頃まだ第二種免許を持っていたのである）、私は曲谷先生のクリニックに眼鏡の調整をお願いしに行った。すると曲谷先生が、白内障があるということを発見して下さった。先生がその時、こんな年で早くも、というニュアンスの言葉遣い（づ）をされたことを今でも覚えていて。ところが私は数日後にチリに立つ予定にしていたので、人一倍眼の老化が早く始まっていることを嫌だなあと思うひまもなかった。

世界で初めて自由選挙によって選ばれたアジェンデ政権が軍のクーデターで倒され、首都サノチアゴにはまだ銃声が聞えているということだったが、私はクーデターの取材に行くつもりではなく、事が起こるずっと前からその予定にしていたので、戒厳令が布かれたのを安心できる材料として、四十五キロの食料に七万円近くの飛行機の超過料金を払って、予定通りタヒチ経由チリに向った。

もっともその前に、曲谷先生が順天堂の教授のところに連れて行って再確認をして下さった。その時、

「何か同じ薬を飲んでたことがありますか？」

と訊かれた。

「今は何も。ビタミンを時々飲むくらいです」

「昔、あったんですか」

「三十代に数年間にわたって不眠症でしたので、睡眠薬と軽い覚醒剤みたいなものと両方を飲んでた時期がありました」

私は薬の名をあげた。夜は睡眠薬を飲まないと寝つけず、薬を飲んで寝ると翌朝その影響が残るので、醒ますものがあるという悪循環だった。英語では覚醒剤と鎮静剤のことを ups & downs というのだそうだが、よくわかる表現である。しかし、それはもう過去のことであつた。私はきれいに薬と縁を切り、それと同時に自然に書くものも見えて来て、「文学をするために苦しむ」